

『団袋』所収西鶴・団水両吟半歌仙注釈稿（二）

水谷隆之

夜話

振舞ユルユルんあたこのはつれ比叡ヒキの雪

情にあたる小野の炭竈
春になる世間の今朝は閑にて

膳居ならふ窓の梅か香

二里行は月夜に渡る隴川

火影に青き人の白はせ

なけきても経帷子にきはまりて

うきよの外をかたる

たまくらの夕女に女客

一度くにかはるいり物

なまぐさき小家かちなる須磨
月に見とれて居る人は唯ソ

弟は月に見えぬ痛のみな白し

くゝる垣根によわる薔

老ぬれはつるへの縄をたくり捨

呼にやるまの遅き鍼立

花鳥をひとり喰ての暮寂し

障子あくれはつはなたんほゝ

18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

全西 団水
鵬

『俳諧団袋』(団水編、元禄四年正月刊)に収めら

れた、西鶴と団水による両吟半歌仙「振舞ん」の巻の

注釈である。当該期における西鶴や団水の俳諧の手法

を示すことを目的とし、各句に「語注」「解釈」を施す

した。

『俳諧団袋』（団水編、元禄四年正月刊）所収西鶴・団水両吟半歌仙二巻（「濁り江の」の巻・「振舞ん」の巻）のうち、「夜話」と題された「振舞ん」の巻についての注釈である。注釈に際しては、「濁り江の」の巻を掲載した前号（『京都語文』17号）に引き続き、以下の方針に拠った。

（凡例）

- ・底本には、東京大学総合図書館蔵西竹文庫本（酒二二二一）を用いた。
- ・「団袋」本文は、底本通りの翻刻を本稿の冒頭にまとめ示した。ただし、各句の注釈においては、濁点を私に施してある。
- ・【語注】【解釈】においては、資料引用にあたり、旧字体の漢字や略字・異体字などは原則として現行の字体に改め、ルビを省略し、私に濁点・句読点を施した。
- ・句の上に句番号を付け、該当する句の句番号の右横にウ（裏）の略号を付した。
- ・【解釈】では、一句の意味内容、前句との付合を中心に説明した。付合については特に、へぬけへとびといった方法に着目し、句の表に現れない語を示すことにつとめ、付合語の連想関係を矢印（↓）をもって示し、これをゴチックで表示した。

・式目上の属性は、必要なものに限り示した。

1 振舞んあたごのはつれ比叡の雪

団水

冬（雪）。名所（あたご・比叡）。山類（あたご・比叡）。降物（雪）。

【語注】

はつれ はつれ雪。はらはらと降る雪。また、薄く降り積もった雪。はだれ雪。「斑雪（ハタレユキ／ハツレユキ）半泮（トクル）之雪也」（『書言字考節用集』）。「踏ちらす人のこびんよはつれ雪 乗正」（『犬子集』寛永十年刊）六・雪）。

あたご 愛宕山。京都市右京区北西部の山。東北部の比叡山と対峙する王城鎮護の聖地。「雪―愛宕・比枝」（『小傘』）。

【解釈】

振る舞いましょう、愛宕山のはつれ雪と比叡山の深雪を、の意。東西に相対してそびえる比叡山と愛宕山を出し、その雪景色を客人に振るまおうと言った、談林流の誇大表現。「振」「舞」「雪」は縁語。「両吟」と題した半歌仙「濁江の」の巻が西鶴の発句ではじまったので、当巻は団水が発句を詠んだ。俳言は「振舞ん」。

2 情にあたる小野の炭竈

西鵬

冬（炭竈）。名所（小野）。山類（炭竈）。

【語注】

小野 山城国愛宕郡（京都市左京区）、比叡山西麓の小野。大原と同様に詠まれる。「正月におがみたてまつらむとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば雪いと高し」（『伊勢物語』八十三段）。「斧―比えの山の麓」（『類船集』）。「非山類分…小野へ小野の奥／立田の奥」（『増補番匠童』元禄四年刊）。

炭竈 木材を蒸し焼きにして木炭を製造する竈。冬の炭竈は小野の代表的な景物。「炭竈 付合ニハ 雪晴る山 小野の奥」（『竹馬集』）。「すみかまには…小野の奥」（『拾花集』）。「小野（山城）―炭竈」「炭―小野」（以上『類船集』）。「山類用の分…炭竈」（『増補番匠童』）。

【解釈】

小野の炭竈の火にあたったように、心があたたくくなりました、の意。「比叡の雪」↓「小野」（小野（山城）―ひえの山・雪ふり）『類船集』、「雪」↓「炭竈」（雪―炭焼）『黒新・炭―雪の山』『小傘』。前句の「はつれ」「雪」に、それぞれ「あたる」「炭」を対照した。なお、「雪と炭（墨）」は、物事の正反対なこと、隔りのはなはなだしいことをいう諺（「雪と墨 各別にたがひたる喩なり」『諺

苑』。「かきくれてふりくる空や雪と墨」『毛吹草』六。「炭やきの猶色黒し雪の山 正秋」『犬子集』六・雪）。愛宕山と比叡山を向かい合わせにした前句をうけ、「雪」と「炭」とをさらに対照したのである。「情にあたる」とした意は解しにくい、西鶴は『西鶴名残の友』（元禄十二年刊）巻四の一にこの時の団水との小野の炭竈見物の様子を記し、「柳桜も、年よりたる人の姿を見るとき、冬山の淋しき比、都にのぼりて、俳諧の友とせし団水・言水など、うき世の事どもを語りなぐさみて、何も心にかゝらぬ衆介、世間のいそがしき時、ことに隙坊主と、我身をうち笑ひて（中略）彼は見る程目がこえて、同じ人間のうまれ所、田舎住ひのいと口惜。身は煙の種なる物をと、かへるさに小野の炭竈を見物いたしけるに」と、やや自嘲気味に老の淋しさを述懐している。気心の知れた団水との両吟であるゆえこの心情を忍ばせて、共に見物した炭窯の火で心の中もあたたくくなった、と言ったものであろうか。ただし、当句をとりたてて述懐句とみる必要はない。発句に名所（あたご・比叡）が詠まれたため、名所（小野）を出した（参考『発句に、神祇・尺教・恋・名所等ならば、脇にもすべし』『増補番匠童』）。

3 春になる世間の今朝は閑にて

全

春（春）。時分（今朝）。

【語注】

世間 現世社会。この世。

今朝 こは元旦。なお、「今朝の春」は元旦を祝つていう語。立春の朝の意にも用いることがある。「立春：今朝の春」（『竹馬集』）。「立春には：長閑」（『拾花集』）。「朝—長閑」（『類船集』）。

【解釈】

昨日までせわしかった世間も、新年を迎えた今朝はなんと
も長閑である、の意。情↓閑。世の中はせわしないもので、
ことに昨日の大晦日はたいそう慌ただしかったが（「絢
（セワシキ）—世間・師走」「小傘」、それに比べ今朝は
長閑なものだと言つて、新春を慶賀した。新春の景を詠む
うえで、「小野」「炭」↓（氷室・氷様）↓「世間」「春の
朝」（「ひのためしには：春の朝」「拾花集」、「氷様 付合
ニハ 春の朝」「竹馬集」、「小野—氷室」「氷様—春の朝・
炭団」「世間—氷様」以上『類船集』）などの連想を働かせ
たか。なお、「氷様」は、氷室に収められている氷をその
厚さなどを模して石で作つたもの。元日の氷様の奏で天覧
に供される。俳言は「世間」。

4

膳居^{スエ}ならぶ窓の梅が香

団

春（梅が香）。居所（窓）。

【解釈】

新春を迎えお膳を据えならべた、春風につて窓からは梅
の香りがただよってくる、の意。「あさあけの窓吹く風は
さむけれど春にはあれや梅の香ぞする」（玉葉集・春上・
六一・権大納言典侍）をふまえ、「春」「朝」↓「窓の梅が
香」と付けた（参考「窓—梅」「春風—梅匂ふ」以上『類
船集』）。食膳（俗）と梅（雅）とを「香」で対照したのが
作意。俳言は「膳居ならぶ」。参考「梅が香や客の鼻には
浅黄椀 許六」（『俳諧問答』元禄十一年刊）。

5 二里行ば月夜に渡る臙川

鵬

春（臙月夜）。夜分（月夜）。水辺（川）。月の定座。

【語注】

臙川 おぼろにかすんでいる川の意か。他の用例未見。
なお、臙月夜は、ほんのりとかすんだ月。また、おぼろ月
の出ている夜。

【解釈】

宿を出立してから二里ばかり歩んだが、そうすると臙にか
すんだ月夜の川面を渡ることになった、の意。「窓の梅が
香」↓「臙」「月」（「臙月夜—梅かほる窓」「類船集」、「梅
—臙月」「小傘」）の付筋により、梅香る春の夜は月も川も

おぼろにかすんでいるとした。前句を宿屋の朝食、旅立ちと見てその旅人の姿を詠み、春風にただよう梅が香を楽しんでそぞろに歩むうちに日が暮れてしまったとしたものか、やや付意は解しづらい。春の句は三句以上続けるため、月の定座のここは「朧月夜」とした。俳言は「二里」。

6 火影に青き人の良ばせ

団

雑。夜分（火影）。人倫（人）。

【語注】

火影 灯火の光。「姿―火影」（『小傘』）。

良ばせ かおつき。かお。容貌。「飾_レ躬正顔（カンバセ）以獲_三高官_一是謂_三盜端_一」（『三略』）（『文明本節用集』）。

「伊勢はいかに艶なる良ばせ、小町はいかなる美形ならん」（『新可笑記』〈元禄元年刊〉巻四の二）。

【解釈】

灯の光に照らされ、人の顔が青く浮かび上がっている、の意。「桃灯―舟の中」（『小傘』）といった付心を働かせ、川面を渡る船中の景を軽く付け合わせたのであろう。「月」

↓「良」（「顔―月」『類船集』）をあしらう。

ウ

7 なげきても経帷子にきはまりて

鵬

雑。無常（経帷子）。

【語注】

経帷子 仏教の葬式で、死者に着せる衣。白麻などで作り、縫い目の糸はとめないでおき、衽や背には名号、題目などを書く。寿衣。経衣。「大形はかぎりの浮世と極め、経帷子をぬはせ」（『男色大鑑』〈貞享四年刊〉巻二の四）。

【解釈】

嘆いても仕方がない、この人はもう経帷子を着た亡き人になつてしまった、の意。前句の人を死人とみなして、「青き人の良ばせ」↓「経帷子」と付けた。俳言は「経帷子」。

8 うきよの外をかたるよしはら

団

雑。恋（よしはら）。

【語注】

うきよ 憂き世。浮き世。つらくはかないこの世。「ひさしくなじみたる女房頓死して、扱もうき世とうたてかりき」（『好色盛衰記』〈貞享五年刊〉巻三の三）。

よしはら ここは遊郭吉原。

【解釈】

（どんなに嘆いたところで、人はどうせ死ぬのだと悟つて）世俗を離れた語らいを吉原でしている、の意。「経帷子」↓「うきよの外」の付筋のもと、これをあの世ではな

く「世の外」すなわち非日常の世界である遊廓吉原のこととした。あるいは前句の「なげきても」より、当時遊里で流行の投節「嘆きながらも月日を送る、さても命はあるものを」(『新町当世なげぶし』。「思ひわびさても命はあるものを」を憂きに堪へぬは涙なりけり」(千載集・恋三・八・道因)による)を発想し、遊廓吉原を出したか。とすれば、当句が付いた前句の意は、「嘆きながらも月日を送る…」と遊里では謡っているが、その外の人の命はどんなに嘆いてもなくなってしまう。とかくこのうき世はままたうないものだ」となる。なお、この投節は、「井筒によりものか」(『好色一代男』天和二年刊)巻一の一)、「いかにも覚悟と、世之介に引せて、膝枕して、さても命はと投節」(『好色一代男』巻七の一)、「念仏の替りに、なげきながらも月日をおくると、調子違ひの小歌」(『諸艶大鑑』貞享元年刊)巻四の三)、「大晦日の色三絃、誰はばからぬなげぶし、なげきながらも月日をおくり、けふ一日にながい事、心にものおもふゆゑなり」(『世間胸算用』元禄五年刊)巻二の二)等々、西鶴の浮世草子に多出する。俳言は「よしはら」。

雑。恋(たまぐら・女)。人倫(女・女客)。夜分(たまぐら・夕)。

【語注】

たまぐら 手枕。ここは男女の共寝することをいう。

「Tamacura (タマクラ) : 他の人の頭の下に片方の腕を入れ、枕の役を果たすようにすること。歌語」(『邦訳日葡辞書』)。

女客 女の客人。その場に来ている女。ここは、遊所に遊びに来ている女。「哥うとふ程の末の女良を宿にまねき、酒の事かさなり、夜更て女客もかへり、枕も定ず眠けるに」(『諸艶大鑑』巻四の四)。

【解釈】

そろそろ手枕で共寝をする夕べであるのに、女客が長話をしている邪魔なことだ、の意。とかく女の話は長いものであることから、「かたる」↓「女」といった付心を働かせたのである(参考「語ル」女「小傘」。疎句付であるが、「うきよ」↓(夢)↓「たまぐら」(「夢」うき世「類船集」)の遠いあしらいも認められる。俳言は「女客」。

10 一度くにかはるいり物 雑。

【語注】

一度一度に そのたびごとに。「一度一度にくだされ物ばつと此沙汰あつて、皆々取込事を願ひ」(『本朝桜陰比事』〈元禄二年刊〉巻五の八)。

いり物 入物。要物。必要とするもの。入用品。「今の世の女、むかしなかつた事どもを仕出して、さりとて身をたしなみ道具数々なり。是に氣をつけて見しに、首筋より上ばかりに、入物十六品あり」(『好色盛衰記』巻三の三)。

【解釈】

女の客は、買い物のために要りようの品が変わることだ、の意。前句の「女客」を、買い物をして訪れた客とみなした。「女に女」の重詞に「一度く」の重詞を向かいあわせ、前句との付け肌の調和をはかった。俳言は「一度く」「いり物」。

11 なまぐさき小家がちなる須磨あかし

鵬

雑。名所(須磨・あかし)。居所(小家)。水辺(須磨・あかし)。

小家がち 小さい家が多く立て込んでいること。また、そのさま。「是を取集けるに、小家がちなる世帯をみれば、無常の発りぬ」(『日本永代蔵』〈貞享五年刊〉巻五の二)。「けふ一日の暮せはしく、こと更小家がちなる所は、喧嘩と洗濯と壁下地つづくと、何もかも一度に取まぜて」

(『世間胸算用』巻一の二)。

【解釈】

魚の生臭い海土の小家が多く立て込んでいる、須磨・明石の浦である、の意。前句の「いり物」を「煎物」と解して、「煎物」↓(海土)↓「なまぐさき小家」「須磨あかし」(「蟹」句作 あまの小家「竹馬集」、「須磨―海土人」「明石―海土」以上『類船集』、「鯉(なまぐさき)―海土」「小傘」と付けた。俳言は「なまぐさき」。「一度一度」に「小家がち」がへうつりへになつてゐる。なお、「煎物」は、ここでは魚類を煮て干した、煎海鼠や煮干しなどのこと。

12 月に見とれて居る人は誰ッ

団

秋(月)。人倫(人)。夜分(月)。

【解釈】

(須磨や明石の浦で)月に見とれている人は誰であろうかの意。『類船集』に「夕顔―小家ならび」とあるように、『源氏物語』「夕顔」巻「げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしうちよろほひて、むねくしからぬ軒のつまなどに」から、「小家がち」に「夕顔」を付ける作例が以前には多かつたが(謡曲「夕顔」にも「物のあやめも見ぬあたりの、小家がちなる軒の

つまに」とある。参考「京わきや小家がちなる町はづれ／
かすかにすむはたが目かけもの」『信徳十百韻』延宝三年
刊）、ここは、「須磨あかし」↓「月」として、月を見て都
に思いをはせる「源氏」を面影付にした（『明石―月・源
氏の巻』「須磨―源氏」『類船集』）。参考「月のいとはなや
かにさし出でたるに、「今宵は十五夜なりけり」と思ひ出で
て、殿上の御遊び恋しく、所どころながめたまふらむかし
と、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたま
ふ。」（『源氏』「須磨」）。参考「あかずかなしくて、（稿者
注・桐壺帝の）御ともに参りなんとなきいり給ひて、みあ
げ給へれば、人もなくて、月のかほのみきらきらとして、
夢の心ちもせず、御けはひとまれる心ちして、空の雲哀に
たなびけり」（『源氏』「明石」）。

13 倂はしれぬ踊のみな白し

秋（踊）。

鵬

【語注】

倂 はつきりとした姿形。前田金五郎氏『西鶴語彙新
考』（平成五年一月 勉誠社）「面影」の項参照。

踊 盆踊り。当時、白帷子に黒帯をしめて踊るのが流行
ここは、月の天女の舞を白帷子で踊る盆踊りの様に見立て
たか。「闇にても人はかしこく、老いたる姿をかつかず、

白き帷子に黒き帯のむすびめを当風にあぢはやれども」
（『好色五人女』へ貞享三年刊）巻二の二）。「五十八ヶ所
の水茶屋の女も、夜目には白帷子に黒き帯ぞかし」（『諸艶大
鑑』巻八の二）。

白し…白衣の「白」に、未熟ないし素人の意の「白し」を
かける。「諸分合点のゆかぬお客なれば、素ひ事ども有べ
し」（『好色盛衰記』巻三の四）。

【解釈】

はつきりとした姿形は分らない、その踊る姿はみな白く
光っている、の意。「月（月宮殿）」↓「踊」「白」（舞―
月の都）「白衣―月宮殿」以上『類船集』。「白し」に「白
（衣）」と「白（素）し」をかける。謡曲「羽衣」に、「白
衣黒衣の天人のかずを三五にわかつて一月夜々の天乙女」
とあるように、月宮殿に住む天女たちには白衣十五人と黒
衣十五人があり、その白衣と黒衣の割合で月が満ち欠けす
るものとされた。その「白衣」の天女の舞を、「白い」す
なわち素人風の盆踊りに見立てたところが俳諧。「月」↓
「倂」をあしらう（参考「入がたの月には山のはをかこち、
或遠きさかひを倂にうつし」『初学和歌式』三・月）。俳言
は「踊」。参考「鹿に連泣きすかす抱守／面影や位牌に残
る夜半の月」（『西鶴独吟百韻自註絵巻』元禄五年頃成）。
参考「名月（略）月の都、月宮殿の事也」（『増山の井』）。

参考「君も御感の余りにや。舞樂を奏して舞ひ給ふ。月宮殿の白衣の袂」(謡曲「鶴亀」)。

14 くづる垣根によわる薜

団

秋(薜)。居所(垣根)。植物(薜)。

【語注】

薜 ヒルガオ科の蔓性一年草。夏の早朝、じょうご形の美しい花を開くが、日が高くなる頃には凋んでしまう。
季・秋。「弱キー権」(「小傘」)。「権は踊らぬ昼の気色して、ゆふべふしみにありし物がたりをきけば」(「色道大鼓」)
〈団水作、貞享四年刊〉巻二の一)。

【解釈】

(盆踊りのあと朝帰りをして)こっそりと忍んで垣根を潜るが、弱り切った私の顔に同じく、垣根の朝顔の花もすっかり萎れてしまった、の意。「俳」↓「薜」(「かすがののなかのあさがほおもかげにみえつついまもわすられなくに」伊勢集・四一三、など)。「俳」「踊」↓(「忍ぶ」)↓「よわる」「くづる」(「しのぶには…よはる身・みし俳」『拾花集』、「忍ぶ―よはる身・みし俳」『類船集』、「挑―忍びノ者」『小傘』)の連想にもよるか。参考「不慮に一夜乙女の姿抱てしめ／雲の通ひ路躍はしのび路」(『西鶴大矢数』延宝九年刊)。参考「あさがほにまた崩さるゝ踊哉

団水」(『鳥羽蓮華』和海編、元禄八年序)。

15 老ぬればつるべの縄をたぐり捨 雑。述懐(老)。

鵬

【語注】

つるべ 釣瓶。縄や竿の先につけて井戸の水をくみ上げる桶。こは、「かの後撰集の歌に、年経れば我が黒髪も白河の、みつはぐむまで老いにけるかなと、詠みしもわらはが歌なり。(中略) 檜垣の女の身の果を、水むすぶ、釣瓶の縄の、釣瓶の縄の繰り返し」(謡曲「檜垣」)をふまえる。

【解釈】

老いてしまったので、釣瓶の縄を繰り、それを投げ捨ててしまった、の意。古来朝顔には無常が詠まれることや(「朝顔―露の命・無常」『類船集』、「垣根」↓「縄」(「縄―垣」(『類船集』)といった付詞、あるいは「薜」↓「つる」(「蔓―朝顔」『小傘』)、「よわる」↓「老」(「弱―老人」『小傘』)といった付心のもと、「垣根」↓(「檜垣↓檜垣の老女」)↓「つるべの縄」と連想し(「釣瓶―檜垣の女」『類船集』)、「檜垣の老女ではない私は、釣瓶の縄を繰り返し繰って水をむすぶ必要などないのである」との意を表した。「檜垣の女(老女)」をぬいてできた面影付け。

「檜垣の老女」の苦しみ、懺悔の象徴である水を汲む行為に對し、現実の人間はそんなものは「たぐり捨」てしてしまうのだと言いつつたところに西鶴一流の俳諧があり、それは謡曲「檜垣」を作品の背景に色濃く映した『好色五人女』や『好色一代女』の世界に通じるものでもある。参考『白波落す橋のまん中／茶の水に釣瓶の縄をくりかへし／ふり分髪より相借屋衆』（『大坂独吟集』宗因編、延宝三年刊）。

16 呼にやるまの遅き鍼立

雑。人倫（鍼立）。

団

【語注】

鍼立 鍼術用の針をうって病気を治療すること。ここは、それをする鍼医。「頓死する事いづれもおどろき、医師・鍼立をよびて、生薬をあたへけるに」（『新可笑記』へ元禄元年刊）巻二の六）。

【解釈】

鍼立てを呼びにやったが、やってくるのがなんとも遅いことだ、の意。前句を井戸に身投げをしたと解し、その人を蘇生させようと鍼立を呼んだのである。「老」↓「鍼立」（参考「年寄―医者」「類船集」）をあしらう。あるいは釣瓶の縄をたぐって捨ててしまった前句に「腹立ち」の様子

をみて、それは呼びにやった「鍼立」が遅いせいだと、その理由を付けて笑ったものでもあろうか（参考「腹立―鍼」「類船集」）。俳言は「呼にやるま」「鍼立」。

17 花鳥をひとり喰ての暮寂し

鵬

春（花鳥）。人倫（ひとり）。植物（花）。動物（鳥）。花の定座。

【語注】

花鳥 ここは、花と鳥。なお、「花鳥」は四季の風物の代表的なものともされ、「風流の道」の意で用いられることもある。「花鳥の色音など常に歌によめり。四季の花鳥といふ事あり。春は梅に鶯、夏は卯の花に時鳥、秋は菊に雁、冬は雪の花に水鳥といへり」（『倭訓栞』）。「花にやどれる鳥也。たゞはなと鳥とをいふ也」（『増山井』）。

【解釈】

（呼びにやった鍼立さえなかなかやって来ず）花が咲き、鳥がさえずる季節なのに、誰ともそれを共にしない春の暮れはなんとも寂しいものだ、の意。「はな鳥の色をもねをもいたづらに物うかる身はすぐすのみなり」（後撰集・夏・二二・藤原雅正）をふまえ、孤独な寂しさを詠んだ。当時の西鶴のこうした心境は、「垣根の葛秋霜にいたみ、朝顔あさましく、花見し朝とは格別に替りて（中略）うき

世に住める耳の役に聞ば、北隣には養子との言葉からかい、後には俳言つよき身の恥どもいひさがして、跡は定まつて盃事になるも、おかしき人心と、我はひとり淋しく、雀の小弓など取出して手慰みするに」(『西鶴名残の友』巻四の四)などに瞥見する。俳言は「喰」。

18 障子あくればつばなたんぼ、

団

春(つばな・たんぼ)。障子(居所)。植物(つばな・たんぼ)。

【語注】

障子 部屋の内外を仕切る障屏具の一種。絹布を張った襖障子、唐紙を張った唐紙障子、台脚がついていて室内を移動させることのできる衝立障子などがある。ここは、明かりを取り入れやすいように片面だけに白紙を張った明かり障子。

つばな チガヤの花。季・春。「白茅(ちがやツバナ)

本草蘇頌曰。春生芽如針。俗謂之茅針(ツバナ)。小児このんで食す。無毒。破血止血。つばなとはちばななり。ちがやの花なり」(『大和本草』九)。「三月：茅花」(『増補番匠童』)。

たんぼ、 キク科の多年草。日当たりの良い山野、路傍に生える。初春から初夏の頃まで黄色や白色の花を咲かせ

る。漢名、蒲公英。季・春。「たんぼの花は、さのみもてはやすべき色香もあらねど、小鼓の音に其名をよせて、鶯の笛の段、こてふの舞の内などいひならはす」(『山之井』)。「嫁娘こころうきたつ春にあひて／よもぎたんぼは恋種やつむ」『信徳十百韻』延宝三年刊)。「花見にと女子ばかりがつれ立て 芭蕉／余のくさなしに重たんぼ、岱水」(『炭俵』元禄七年刊)。

【解釈】

その障子を開ければ、外はつばなやたんぼの花盛りですよ、の意。「花鳥」↓「障子」(「色鳥—障子」『類船集』)。

『徒然草』二十六段「堀川院の百首の歌の中に、『むかし見し妹が垣根は荒れにけりつばなまじりの重のみして』。

さびしき景色、さる事侍りけん」により「寂し」↓「つばな」(参考「さびしさに殿のるす琴引ならし／背戸にはつばなすみれのみ也」『続山井』)と付け合わせることで、孤独な寂しさを詠んだ西鶴の前句を受け止めつつ、やさしく楽しげな「たんぼ」をさらにそっと付け添えた。明るい春へ西鶴の目線を促してその気分転換をはかろうとするかのような、軽々とした挙句である。なお、「障子」は冬の季語であるが、ここは季語とはとらない。俳言は「障子」「たんぼ」。

*本稿は、平成二三年度科学研究費補助金（若手研究（B））による研究成果の一部である。